



セルバンテス I

会田 由 訳

世界古典文学全集

39

筑 摩 書 房

セルバンテス I

世界古典文学全集 第39卷

昭和40年2月25日発行

訳 者 会 田 由

発 行 者 古 田 晁

発 行 所 株式 筑 摩 書 房
会社

東京都千代田区神田小川町 2-8

振替東京 4123 電話(291) 7651

目次

才智あふるる郷士ドン・
キホーテ・デ・ラ・マン
チャ 前篇

会
田

由
訳

セル
バン
テス

I

才智あふるる郷士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ 前篇

ヒブラレオンの侯爵、ベナルカーサルおよびバニャーレスの伯爵、ブエブラ・デ・アルコセールの子爵、カビーリヤ、クルエーロおよびブルギーリョス諸都邑の領主なる、

ペーハル公爵に献ず

芸術、なかでもみずからの高貴さによって、俗衆の供用と利得に屈することなき諸芸術を好んで庇護し給う貴公子として、あらゆる種類の書物に対して閣下の与え給う厚い歓待と榮譽を信じつつ、ここに私は、『才智あふるる郷士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ』を、閣下のいとも輝かしい名の下に公けにしようとした決心をしました。これは、学識ある人々の家でできあがった諸作品がまとうのを常とする優雅、博識というがごとき高貴な粉飾はいささかもまとうてはおりませんが、己が無知の狭隘な境地に満足せず、ともすれば他人の労作にはなほだ峻烈不当な断案を下すを常とする、ある種の人々の批判に惹なく、閣下のご庇護の下にたえうるために、高貴なご身分に対して当然払うべき畏敬の念を抱きつつ、これを閣下の庇護のうちに気持よくお受け入れくださるよう懇願いたすものでございます。されば、賢明なる閣下は、私の意のあるところを明察し給い、かくも軽少なる奉仕の貧しさを蔑視し給うごときことなきを確信いたす次第でございます。

ミゲル・デ・セルバンテス・サペードラ

序言

閑暇な読者よ、予がこの書物を、己が知能の子として、想像しうるかぎり、およそ美しい、高雅な、巧緻なものであれかしと願っていることは、いまさらとりたてて誓わないでも、お信じくださるところであろう。とはいえ、自然の法、あらゆる物は己れに似たものしか生まぬという、この自然の法には、ついに予もまた逆らうことができなかったのである。されば、この乏しい、一向に教養のない予の才智が、あたかもあらゆる不便がはばをきかせ、あらゆるわびしい物音の住み家たる牢獄のうちで生まれたもののような、干からびて、瘦せ細り、とりとめもない、しかも種々雑多な、いまだかつて誰一人思いついたことのない思考にみちた息子にも譬うべき物語以外に、いったい何を生むことができたろう？ 静謐、落ちついた境地、田園の楽しさ、晴朗な天気、泉のせせらぎ、精神のやすらぎ、こういうものこそいかなる不妊の詩の女神も、豊饒に変え、この世を驚異と歓喜でみたすていの、数々の分岐を世にもたらしめるのに大いにあずかって力あるものである。どうかすると、父親が醜いみじくも可愛気のない息子を持ちながら、子供の愛に盲になって、子供の欠点が見えないばかりか、あるうことか欠点を頭のよさとも美点とも思いこんで、友達連にむかつて才氣か愛嬌のごとく得々として吹聴に及

(1) 本名はドン・アロンソ・ディエゴ・ロベス・デ・スニガ・イ・ソトマヨール(一五七七一六一九)。学問芸術の庇護者という評判は得たが、それは深い理解者ではなかったらしい。

(2) 従来アルガマシーリヤ・デ・アルバーの牢獄で『ドン・キホーテ』を書き始めたと思われているが、ロドリーゲス・マリンは作者が一五九七年から一六〇二年に入っていたセビーリヤだろうと論じている。

ぶこともまだではない。しかし予は、一見父親に見えても、じつは『ドン・キホーテ』の継父なのだから、一般の風潮に従うつもりもなければ、他の連中のやるように、愛する読者よ、予は両眼にほとんど涙さえうかべて、この予が息子のうちに、あなたのお氣づきになる数々の欠点を、許したり見逃したりしていただきたいとお願ひする所存は毛頭ない。なぜならあなたはこの子の縁者でもなければ友達でもない、あなたはご自分のからだの中にちゃんと自分の精神を持ておいでだし、およそ非のうちどころのない確固たる自由意志を持ておいでだ、それにあなたはご自分の家の中にいらっしゃる、ここでは王が課税の主でいらっしゃるごとく、あなたは一切の主だ、のみならず『己が外套のうちでなら王者も害すべし』と世間で言い習わしている謬もご存じのはずだからであるいや、あなたはこういう一切のことから自由な立場においでだし、すべての思惑だの義理だのというものから掣肘を受けることもないのであつてみれば、この物語について、心に浮かんだことは一切合財おっしゃればよいものだ、しかもけなしたからといって非難される恐れもなければ、褒めたからといって別に報いを受けることもないのである。

ただひたすら予の念願とするところは、序文の飾りも、よく世間で著書の巻頭に並べたてゐる、ありきたりの十四行詩、警句、頌詞などの無数の羅列もなく、この物語をありのままに裸のまんまであなたに差しあげたいということだった。なぜなら、なるほど予がこの物語を作るのに多少骨を折つたことは事実だが、あなたがこれからお読みになるうというこの序文よりつらいと思つたものはないと、はつきり申し上げることが出来るからである。予は幾度かこれを書こうとして筆を取つたが、何を書いていいかわからないで幾度も筆を置いた。一度そうやってほんやりと、紙を前に延べ、筆を耳にはさみ、机に肘をつき、頬に手をあてて、何を書いたものかと思ひにふけてゐるところへ、ひょっこり快活な、しかもなかなか物わかりのいい友達はいつてきたのであるが、この男は、予の考えこんだ様子を見て、その理由を訊ねた。そこで、予は別に隠し立てしないで、『ドン・キホーテ』の物語のために書かなければなら

ない序文を考えているのだが、それがあまりつらいので、いつそのこと書くのを止めようか、それともあれほど高邁な騎士の数々の武勲を公けにするのを止めようかとまで思つてゐるのだと話した。

「それというのも、わがはいが世間に忘れられて沈黙のうちに眠つて以來過ぎたこんな長年月の後で、今頃になつて積み重ねた齢を背中に負つて、しかも、ちやうど灯心草か何ぞのようにひからびた、創意も乏しければ文体も貧弱な、思想も稀薄で、そのうえに博識も学説も欠如した、おまけにわがはいの見る他の書物のごとく、欄外に引用句もなければ巻末に注釈もない、架空な物語などをかかえて、おめおめと出て来るところを見たら、世間で俗衆と呼んでいる年とつた立法者が何と言うだろう、このことがわがはいをいささかも当惑せしめないなどと、いったいどうすれば君は考えるだろうか？ 何しろ他の書物ときては、いづれも荒唐無稽な平俗本のくせに、アリストテレスやプラトンやその他凡百の哲学者の箴言だらけだから、おかげで読者諸君はすっかり感心して、つい著作者を学問のある、博識な、雄弁な人物だと思ひこむほどなんだからねところで、この連中が聖書を引用するときときたらどうだろう！ 誰しも聖トマスか教会の博士方だとしか思わぬに相違ない、それというのも先生方は、この場合、ある行で無我夢中の恋の奴を描くかと思うと、別の行ではありがたいお説教をちよつぱり小出しにするという、じつに巧妙な節度を守るものだから、これを耳にしても読んでも、楽しくもあれば面白いということにもなる。ところがわがはいの本ときては、そんなものは何ひとつあるはずがないんだ、なぜならわがはいには欄外に引用するものもなければ、巻末に注釈すべきものもない、それどころか、みんながやるように、巻頭に、アリストテレスに始まってクセノフォン、それからゾイロスかゼウクシスに終わる、といつてもこのうち一方は酷評家だし、いま一方は画工なんだが、ABC順に並べようと思つたところ、だいいちこの本の中でどんな作家を適用していいかわからないんだからね。それにわがはいの本は巻頭に掲げる十四行詩も、いや少なくとも作者が公爵、侯爵、伯爵、司教、貴婦人もしくはごく名の聞こえた

詩人だという十四行詩はなしですまざるをえない。もつともわがはいが二、三の世話好きの友達に頼みさえしたら、彼らが書いてくれることは知っているんだ、しかもわがスペインで高名を謳われている連中の作品もしゃせんた刀うちできないような作品をだ。要するに、君」と、予はなおも言葉をつづけた。「わがはいはドン・キホーテ氏を、現在彼に欠けているこういうもので彼を飾ってくれるような人物を、いつの日か天がつかわし給うまで、ラ・マンチャの彼の書庫の中に埋もれたままにしておくことに決めたんだ。それというのも、わがはいの浅学非才をもつてしては、とうてい欠を補うこともできないし、また一方、何もそういう連中のお世話にならないでも自分だけでも十分に言えるようなことを教えてくれる作者連中をわざわざ探しまわるには、どうもわがはいの生れつき無精で億劫がり屋なんだ。そこでごらんのとおり考えこんで上の空でいたというわけだ。ごいつはお聞きのとおり、わがはいが考えこむだけのことは十分にあるじゃないか」

これを聞くと、友達は軽くひとつ額を叩き、それから大声で笑い出した。

「ごいつはどうも、君、今にして初めて、君を知ってこの方長いあいだずつとおちいついていた迷妄から目ざめたよ、わがはいは始終、君という人を、やることなすことに抜け目のない思慮のある男だと思ひこんでいたんだからね。しかし、今こそ君がそれから隔たること雲泥の差だということがわかった。それにしても、これほど何でもない、造作なく補いのつく事柄に、君のように老練な、他のもつともっと困難なことでもさつさと片づけ、切り抜けていける練達の士を、考えこませたり、意氣沮喪させる力があるなんておかしいじゃないか？ いや、きつと君の知恵が不足だからじゃなく、無精で頭の働かせ方が足りないからだろう。わがはいの言うことが本当かどうか知りたのかい？ そんならわがはいの言うことをよく聞き給え、そうすりゃ、いかにわがはいが、それこそまたたくうちに君の一切の難題を解決するか、あるいはまた、君の言うところでは遊行の騎士道の光明とも鑑とも言いつべき、君のすばら

しいドン・キホーテの物語を世間に出すことすら放擲するほど、君を悩まし沮喪させるという、一切の足らないところを補うか、わかつてもらえようというものだ」

「さあ話し給えよ」と、予は友達の言葉を聞いて返事をした。「君がわがはいの懸念の空白をどうやってみたし、わがはいの混沌たる困惑にどうやって光を点するつもりか？」

これに対して友達が言った。

「君が巻頭に必要だという、それもお偉方やいかめしい肩書の人々の作品がいいという、十四行詩だの、警句だの、頌歌について君の意を用うる第一の問題は、君が自分でせいづらくするというちよいとした努力さえ払えば、何でもなく解決できる、その後でせいづらに君の好きな名前をかぶせて、洗礼をほどこすんだよ、インドのフワン主教の作品だということにしようが、ないしはトラビソンドの皇帝の作品だということにしようがかわらないさ、何でもわがはいの聞いた噂だと、この二人は大した詩人だったそうじゃないか。なほに、よしんばそれが違っていておまけに学問を鼻にかける先生たちやへっぽこ学士連がそのことで君に食ってかかったり、がやがや言いたたりしたところで、それこそ鼻もひつかけるにやあたらないさ。だって君、いくら先生たちが君のインチキを詮索したところで、まさかそいつを書いた君の手をたち切るわけにはいかないんだからね」

「君の物語に挿入するのに、格言や言葉を引用するいろんな著者や作家を欄外に挙げる件については、君が空で覚えているとか、あるいは探したところで大して手間のかららないような格言なりラテン語の文句なりがびつたりと当てはまるように工夫するに限る、たとえば自由や束縛に

(1) セルバンテスは『ドン・キホーテ』の原作者を史家シデー・ハメーテ・ベネンヘリという架空のアラビヤ人だとする技巧を用いている。

(2) 中世紀の架空の人物。なお、トラビソンドは黒海の南岸にあった帝国で、この帝国の征服が理想として騎士道物語にしばしば現れた。

ついで述べる場合には、

Non bene pro toto libertas venditur auro

(自由ハ黄金ノ山トモ換ウベカラズ)

というのを引用するようなもんだ。それからさつそく、欄外にホラテ
イウスだか誰だかそれを言つた人物を挙げるんだ。また死神の力という
ものを主題にするとしたら、

*Pallida mors aequo pulsat pede pauperum tabernas, Regumque
turre*

(蒼白ナル死ノ神ハ等シキ足ヲモテ、貧者ノ小屋モ王侯ノ宮邸
ヲモ訪ズルナレ)

というやつを使う。

もしまた、友情とか、敵に対して抱けよと神の命じ給う愛に関する場
合なら、それこそ遅疑することもなく聖書につくことだ、こいつはほん
のわずかばかり調べる気さえあればできることだし、少なくとも神さま
ご自身の言葉で言うことができる、*Ego autem dico vobis: diligite
inimicos vestros* (然モ我爾曹ニ告ゲン爾曹ノ敵ヲ愛メヨ)と。もし邪
悪な考えについて書くようなときなら、福音書の、*De corde exeunt
cogitationes malae* (心ヨリ出ル所ノ惡念)を利用し給え。また、友人
の頼みがたいことを扱うつもりなら、ちゃんとカトーがいて、彼の連句
を教えてくれる。

*Donec eris felix, multos numerabis amicos,
Tempora si fuerint nubila, solus eris.*

(汝ノ幸ナルアイダハ友多カラシ、

サレドモシ天候曇ラバ汝ハ孤独ナラン)

のみならず、こういうラテン語の切れっぱしやその他これに類した片
言隻句のおかげで、世人は君を古典学者と思ひこむに違いない、しかも
古典学者であることは、当世じゃ少なからざる名譽だし得のゆくことな
んだからね。

次に本のうしろに注釈をつけるという一件は、ざっとこんな工合にす

ればわけなくできる。もし君が本の中で何か巨人の名を挙げるとしたら、
その巨人は巨人ゴリアテということにし給え、これなら全然骨の折れる
ことはないはずだし、もうそれだけで大した注釈ができるはずだ、とい
うのは次のようにやれるからなんだ。すなわち『巨人ゴリアテ若シハ
ゴリアト。ペリシテ人ニンテ、羊飼ダビデコレヲ石ヲ以テ強ク打チ、テ
レビントノ谷ニ殞セリ、列王紀略ニ記サルトコロニヨル』ただし書い
てある章は君が探すんだ。

その次に、君が人文学や宇宙学に蘊奥を極めた男だということを示す
には、君の物語の中にタホ河の名を挙げるようにするんだ、そうすりゃ
たちどころに今ひとつすばらしい注釈をほどこすことになる、こう書く
んだ、『タホ河ハイスパニヤ諸邦ノサル国王ニヨリテ銘記サル。源ヲ
某ノ地ニ発シ大洋ニ注グ、ソノ間名高キリスボア市ノ城壁ヲ洗ウ。而
シテ黄金ノ砂ヲ有スト称セラル然々云々』もし君が盗賊のことを述べる
つもりなら、わがはいがカクスの話をして聞かせよう、こいつはわが
い宙で覚えているのだから。もしまた自堕落な女についてだったら、ち
やんとモンドニエードの大主教がおいでだ、あの人がラミアだのライ
ダだのフロラを貸してくれるだろうし、この女連の注釈なら君だつて
大いに信用を博すること必定だ。つれない女連だつたらオヴィディウス
がメデアを貸すだろうし、魔女や女の魔法使だつたら、ホメロスにカリ
ュプソがあり、ヴェルギリウスにキルケがある。もし剛胆な武将なら、
あのユウリウス・カエサルが自作の『ガリア戦記』の中の自分自身を貸
してくるだろうし、ブルイタルコスならアレクサンドロスを千人くら
い貸してくれるさ。もしまた恋愛について書くつもりなら、せいぜい二
オンスばかりトスカナ語を知つてさえいたら、レオネ・エブレオにぶつ
つかれよう、これならいくらでも教えてくれる。しかし外国にもとめる
のがいやだと思ふなら、わが朝ではフォンセーカの『神の愛について』
がある、この本には君にしろ、どんな奇知縦横の男にしろ、この問題に
ついて知りたいと思うような一切がまとまっている。要するに、君はこ
ういう人名を挙げたり、今わがはいの話した、ああいったいろんな物語

を、君の物語の中で触れるようにとめさえすりゃいいんだ、注釈や説明をつけ加える役目は万事わがはいに一任し給え。わがはい誓って欄外をうずめ、巻末の四ページをきれいに使っておみせしよう。

さて今度は、他の多くの本にあって、君の本にはないという、作者の名前を掲げる件に移ることにしよう。この対策はいたって簡単だ、というのは君がさつき言ったとおりAからZまで、そいつを残らずならべている本を、なんでもいいから、一冊探ささえすればいいんだからね。そしたらこのABC順をそっくりそのまんまわれわれの本に持つてくるんだよ、なかに、よしんばこの誤魔化しがはつきりと見えすいたところで、なにしろ君にはこういう著作者を利用する必要はまあほとんどないのだから、別に差支えはないはずだ。いや、どうかすると、君のこのごく単純な何の奇もない物語の中で、君がこういう著者連を大いに駆使したなぞと思ひこむような、頭の単純な男がいるかもしれないんだ。それに、こういう龐大な著者名目録は、他に役に立つことはないかもしれないが、少なくとも君の本に思ひがけない權威をつけることにならないとも限らない。それに、別にそんなことをしてもなんの得にもならないんだから、君が事実そういう著者に追従したかしかなどということを、わざわざ詮索しようという物好きもいなかろうじゃないか。いや、それどころか、わがはいが感違ひをしないとしたら、この君の本には、君が必要だといったああいふ著者名目録なぞこれっぽっちも必要じゃないね、なぜと云って、この本は始めから終りまで騎士道の書物に対する攻撃だから、なにしろそんなものはアリストテレスの夢にも思ひ起さなかつたことだし、聖バシリウスも何ひとつ言っていないし、キケロだつて知らなかつたんだ、騎士道の書物の荒唐無稽なたらめな世界には、真実の厳正さも、占星の数々の観測も縁なき衆生だ、幾何学の尺度も役に立たなければ、修辭学を用いる論難も一向に力がない。それに俗事と神さまのことを織り混せて、こいつはいわばキリスト教徒の頭脳に着せては禁物の交織だが、そうやってひとさまに説教する必要は何ひとつない。ただ要は書いてゆく作品の中で、物真似の才能をせいぜい発

揮することだ、物真似がうまければうまいだけ、出来上がる作品が優れたものになる。それになにしろ君のこの著作は、騎士道に関する書物が、世間や俗衆の間に持っている權威と勢力を打ち倒す以外に目的はないの

- (1) ローマの詩人、ただしこのラテン語はホラティウスのものではない。
- (2) このラテン語の詩はホラティウス（前六五—一八）の書いたものである。
- (3) マルクス・ポルキウス・カト（前二三四—一四九）。ローマの政治家。ただしこの二行詩はオウィディウスの作品という。
- (4) ローマ神話の有名な盗賊。ヴェルギリウスの『アエネイス』にあらわれる。
- (5) カロス五世の説教師で教訓的著作者アントニオ・デ・ゲバラ（一四八〇—一五四五）をさす。
- (6) ギリシャ神話に現われる魔法にたけた女。
- (7) ギリシャ神話のニンフェの一人でアトラスの娘。オギギア島に住み、難破したオデュッセウスを欲待した。ホメロスの『オデュッセイア』に描かれている。
- (8) ギリシャ神話の魔女。『オデュッセイア』にも現われるが、ヴェルギリウス『アエネイス』第七巻に現われる。
- (9) ローマ最大の政治家武人であるが、その『コメンタリア』、すなわち『ガリア戦記』を指す。
- (10) プルタルコスPlutarchusの俗に『英雄伝』と呼ばれる『対比列伝』に現われる諸英雄をさす。
- (11) 本名はユダス・アブラヴァネル（一四六五—一五三五）。ユダヤ人の哲学者、医者。スペインから追放されイタリアにおもむき著述をした。『愛に関する対話』のスペイン訳は一五六八年。
- (12) クリストバル・デ・フォンセカ（一五五〇？—一六一二）は、スペインのアグステイン派の僧で、その著『神の愛について』（一五九二）は、当時はなほ高く評価されていた。
- (13) 三二九—三七九、ギリシャ教会の長老、書簡体の論集で有名。
- (14) マルクス・トウルキウス・キケロ（前一〇六—四三）はローマのもっとも雄弁な論客の一人。

だから、何もほつきまわって哲学者連から箴言を、聖書から助言を、詩人連から寓話を、修辭學者諸公から文章を、聖者方から奇跡を恵んでもらう必要は全然ない。そんなことよりも、意味のはつきりした、おだやかな、しかもその場その場にしっかりと当てはまる言葉を用いて、君の文章がいかにも平明になり、一句一句が調べ高く輕妙をきわめるように心がけて、君の力のおよぶかぎりなるべく君の意のあるところを表明し、混亂させたり曖昧にしたりすることなく、君の思うところを伝えることだ。それと同時に、君の物語を読むと、沈鬱な男もつい笑い出し、快活な男はいっそう愉快になる、愚者も退屈せず、才子も思いつきの妙に目をみはれば、生真面目な男の纏盛も買わず、賢者もまた賞讃を惜しまないというふうにつとめることだよ。本當に、大勢の連中に見捨てられ、同時にそれよりも多数の連中にてはやされているああいふ騎士道に関する群書の、根本のゆるんだ機關を覆えすということに、君の狙いをあくまでつけることだね、これが成功してみ給え、けっしてこりや馬鹿にならぬ功績だろうよ」

予は黙々としてわが友の言うことに耳を傾けていたのであるが、彼の説があまりにあざやかな印象を刻みつけたので、なんら異論を立てることもなく、それらの説の正しさを認めて、それによつてこの序文を作ろうと思つたのである。心やさしい読者よ、そなたは、この序文の中で、わが友の思慮の深さ、どうにもならないと困っている時に、こういう忠告者を見つけた予の幸運、さては音に聞こえたドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャの物語を、ありのままに、なんの面倒もなく読むことができるというそなたのたのしさをお認めになるに違いないが、このドン・キホーテについては、何年もの昔から今日までモンテイエールの平原に現われたもつとも純情な恋人で、もつとも勇敢な騎士であつたということが、あの地方のすべての住民のひとしく口にする噂である。予は、これほどにも氣高く、誠実な騎士を、そなたに紹介するというこの奉仕を、いささかも誇張するつもりはない。しかし、彼の従士、音に聞くサンチヨ・パンサをお知りになるということでは、是非とも予に感謝していた

だきたいものだ、予の考えでは、この男の中に、くだらない騎士物語の群書の中に散らばっている従士のあらゆる魅力をかいつまんで、読者に提供したつもりである。では、これで、神がそなたに健康を与え給わんことを、そして、予のこともお忘れなさらないようにお祈りする。さらば。

ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャの書物に

顔を知られぬウルガンダ

なんじ書物よ、思慮ぶかく
よき人々のもとにいたらば
愚か人もなれを目ざして
つたなきものとはよも言わじ。
されどもし思いまどいて
愚かなる手にもわたらば
よし彼ら指をくわえて
風流人士の顔をなすとも
たちまちに君はさとらん
あやまてる君がねらいを。

大なる樹によるときは
よきかけを身にぞうくると
経験の教うるごとく
汝を守る幸い星が
ペーハルに大樹を見いで

世々公子の果実をむすび
 今ぞ花さく公爵こそは
 近き世の歴山大帝
 いざ身をよせよ、そのかげに
 好運は勇者が味方。

よしなき書物あまた読み
 心狂えるマンチャびと
 そがなすいくたの冒険を
 君よつづさに語れかし
 上臈^{カサ}、物の具、騎士などに
 うつつをぬかしていにしえの
 オルランドにあやかりて
 心にやどす恋心
 手ごめになるたおやめは
 トボーン村なるドゥルシネア。

象形文字の紋どころ
 記し給うなよ楯のうえ
 かるたあそびは絵札のみ
 勝負をきむるものならず。
 ささげ言葉をつつしまば、
 『見よ、ドン・アルバロ・デ・ルーナ殿
 さてはカルタゴのアンニバル
 スペインへ来しフランソワ
 誰か不運をかこちたる』
 などと皮肉は申すまじ。
 黒んぼ小僧⁷、ラテン語フワンとことかわり
 ラテンの言葉に通ぜよと

神も命じ給わねば
 ラテン語かたる要もなし。
 鋭鋒はこることもなく
 哲学きどりの論議はやめよ
 一語も解せぬ痴れ者が
 口をまげつつ耳もとで

- (1) 古来有名なラ・マンチャ県の平原で、そこにドン・キホーテの住んだという村があった。
- (2) 騎士道物語の代表作『アマデイス・デ・ガウラ』(一五〇八)の登場人物で、変貌自在だから誰にもわからなかったで、『顔を知られぬ』と呼ばれる。なお、この詩と、『こたませ詩人のおどけ者からサンチョ・パンサとロシナンテに』の詩型は、『尻切れ』cabo lo to と呼んで、各行の最終語の最後の音節を切りすて、残った綴りで韻を踏むが、これはセビーリヤの詩人アロンソ・アルバレス・デ・ソリアの発明したものである。
- (3) 最初の献辞のバーハル公爵を指す。
- (4) フランスの叙事詩『ローランの歌』の主人公。シャルルマーニュ帝の十二勇士の一人。後、イタリアの詩人アリオストの代表作『狂えるオルランド』(二五一六)もローランを主人公にした。スペインでは古くからロルダンと呼んでいる。
- (5) 第一章の終りにあるように、ドン・キホーテの思い姫だが、彼は最後までその意をとげることはできなかった。著者はウルガンダに嘘をつかせたのである。
- (6) この四行の詩は神秘文学者ルイス・デ・レオンがバリャドリッドの牢獄に入れられ、無実を訴えた詩に対して、彼の教義上の敵ドミンゴ・デ・グスマンがそれを揶揄して作ったものを、すこし作り変えたものである。ドン・アルバロ・デ・ルーナはカステイリヤ王フワン二世に重用され権力と富をはこったが、のち王のそねみを受けて首をはねられた。
- (7) バルベリア生れの黒人でラテン語をよく覚え、のち母と共にスペインへ来てテラノーバ公爵夫人に仕え、ついでセーサ公爵家の書庫係をした。『ラテン語フワン』と呼ばれたという。

ささやくことを聞き給え
『われに花など用はなし?』

あかの他人のなすことを
描くも知るもさげよかし
己れにかかわりなきことに
たち入らぬこそ賢けれ
人を擲^な葉する仕返し
返し言葉を覚悟せよ。
己が名前を高めんと
君はつとめよひたすらに。
つまらぬ書物を出したなら
絶えぬ非難を覚悟せよ。

ガラスの屋根の家において
隣の屋根をうたんとて
石をひろいて手にもつは
知恵なきわざと知れよかし。
思慮ある人が作品を
ものする筆のためらいを
あえてとがむることなかれ。
小娘どものたのしみに
著作を上木^{じようぼく}なす者は
狂愚のために書く^と知れ。

アマデイス・デ・ガウラ^①より
ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャに

(ソネット)

君をさかりてつれなさを
ポーブレ^{ポール}岩のいただきに
喜びさけて苦をしのぶ
かなしき身すぎまねぶ君。

雨のまなこにはふりおつ
からき涙に渴をいし
銀、錫、銅もなきままに
土をかけてともなせし君。

輝くアポロが天空^{あまそり}に
駒をすすむるそのひまに
とこしなえなる生うけよ。

君は武名をかちうべく
君が祖国は他にすぐれ
君が作者はたぐいなし。

ドン・ベリヤニス・デ・グレシア^③より
ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャに

(ソネット)

世の遍歴の騎士にまさりて
破り、斬り、言い、行ないき
手練をほこり剛勇無双
悪をこらしめ、非理をただせり

いさおはとわにわが名をかかげ
礼を重んじ情を知れり
巨人もわれには侏儒に劣り
名誉に閑し用心ぶかく

運の女神を足下に伏せしめ

頭はげたる機会の神の

前髪とらえて屈伏せしめ

好運つねに月にかかれど

君がいさおを羨むものぞ

ああ偉なるかなドン・キホーテよ！

オリアーナ姫より

ドウルシネーア・デル・トボーソに

(ソネット)

あわれうるわしのドウルシネーア

ミラフローレスをトボーソとし

わが住む都ロンドンを君住む村と取りかえて

こよなき幸を得るは誰ぞ！

君が思いとよそおいを

心にいだき身にまとい

君ゆえ幸を得し騎士の

はげしき戦い見しは誰ぞ！

心やさしきキホーテに

君なし給えるそのままに
誰か清らに身をたもちアマディース殿を逃れえん！

さればうらやむこともなく、うらやまるべきわれならん
悲しきときもたのしみて
悔なきよろこび得てあらん！

アマディース・デ・ガウラが従士、ガンダリンより
ドン・キホーテの従士、サンチヨ・パンサに

(ソネット)

これさ、名物男よ、たまさかに
従士の役をつとめては、

やさしくまめにしおわせて

(1) いわゆる騎士道物語のスペインにおける流行のきつかけを作った、もつとも有名な代表的作品。一五〇八年ガルシ・オルド・ニエス・デ・モンタルボ、もしくはガルシ・ロドリゲス・デ・モンタルボの名で出版されたが、モンタルボが作者であるか、ポルトガルかどこかの作品の訳者であるか不明。ガウラはウエルズの古称。物語はアーサー王伝説の影響をうけ、十四世紀にはすでに成立していたらしい。アマディース・デ・ガウラはこの小説の主人公である。

(2) 原語は *La pena pobre*. 前注のアマディースが恋人オリアーナ姫のもとを去って、苦行をした島山。

(3) 「ロニモ・フェルナンデス作の騎士道小説『ドン・ペリヤニース・デ・グレシア』の主人公。

(4) イギリス王リクスアルテの娘で、アマディースの恋人。

(5) オリアーナ姫の住んだ城で、ロンドンの近くにあったことになっている。
(6) アマディースの従士で、評判の乱暴者。

禍いひとつあわなんだ。

武者修行に鍛と鎌

今ではこれも矛盾せぬ

月をふまえる傲慢をとがめだてする
従士めく、わが無作法も流行だ。

うらやましいのは君が驢馬、君が人氣と
振分けの、おぬしが用意をものがたる
しこたまつめただんぶくろ

ふたたび言うが、おおサンチョ、申し分ないよい男、
おぬし一人におれたちのスペイン国のオヴィディウス
ちよいとふざけておじぎなさるぞ。

ごたまぜ詩人のおどけ者から

サンチョ・パンサとロシナンテに

サンチョ・パンサに

これはこれマンチャの住人ドン・キホーテが、
従士をつとむるサンチョ・パンサ。

ちよいと利口に世わたりしようといつも尻には帆かけてござる

逃げ足早のビリャディエゴさんの
十八番の奥の手は

三十六計逃げるにしかず。

浮世の色気を小出しにしたらば、
これは思うに見事な本の

セレスティーナが気づいたとおりに。

ロシナンテに

これは大バビエカがとおつ孫、
音に聞こえたロシナンテ

瘦せさらばえた咎により

ドン・キホーテを主としたのむ

ひづめのかぎり駆けたおかげで

小麦だけは事欠き申さぬ

めくらの酒をこっそり飲むとき

麦しべ与えたラサリーリに

これぞ習った手段でござる。

狂えるオルランドより

ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャに

(ソネット)

君は公子にあらずとも君に抗せし者はなし

あまた公子のある中の公子となるべき人なれば。

君あるところいずこにも、君に抗する者あらじ、

戦さへのぞみ常に勝ち、ひけをとりたることはなし。

予はオルランド、キホーテよ、恋をいだきてうつつなく

アンヘーリカを求めんと、海のはてさえさすらいぬ、

名譽の神の祭壇にささげしものは『忘却』が

手をふれざりしかの勇氣。

よしわれに似て君もまた、常軌を逸し給えども